淡くなった空

近藤見葉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
淡くなった空

【Ｎコード】
Ｎ４６６５ＢＡ

【作者名】
近藤見葉

【あらすじ】
人類はファンタジーでしかなかった魔法についに手を出した。しかし魔法が使えたところで、感動の冒険物語はどこにも無い。現実の中で、魔法少女を夢見ていた美咲は天井のある街に引きこもり、彼女と付き合っている健太は空を飛ぶことに憧れていた。

第一話

やはり今日も美咲は学校に行かないようだ。きっともうこんな生活に慣れてしまっているのだろう。エプロンを外さずに美咲は僕に弁当を手渡してきた。そして「行ってらっしゃい」と見送られる。まるで夫を愛する妻のように頬を柔らかくして。最初の頃のように「健太も行かないで」と駄々をこねなくなった。それでも送り出す顔にはどこか憂いが見て取れる。目の辺りが笑顔を作りきれていないようだ。どうにか解消してやりたいと思うのだけど、この場面で彼女を安心させる台詞はなかなか思い付かない。代わりにできる限り語調に彼女への好意を含ませて「うん、行ってきます」と言った。ドアを閉めるのはいつだって僕の方だ。鍵を閉めるのも。

アパートの外に出ても室内とあまり変わらない。無感情な光が世界を明るくしている。上を見るとそこには天井がある。そして大きな照明がいくつも並んでいて太陽の代わりをしているのだ。それを直視してもちょっと眩しいだけ。太陽のように暖かさを感じないせいか外出しているという気分にあまりならない。遠くを見れば大きな壁が地平線を隠している。ここは大きな箱なのだ。箱の中にはアニメショップなどの並ぶ大きな通りと、その近くに建っている同様の店、そしてそれらに誘われるようにして経ったいくつかのアパートがある。天井の下にビルなどが建っている光景は、まるでシェルターの中にいるみたいだと思わせることもある。けれど天井も壁も来るかもしれない戦争に備えるための物ではなくて、もっと身近なものから自分たちを守るための物なのだ。

「どうにかしないとなあ」誰もいない通りで呟く。僕も美咲も大学生。本当は美咲だって僕と同じように大学へ行かなきゃいけないのに。行くのをやめてから結構な月日が経っていた。彼女が一人でいる時間にこの件をどのように考えているのかわからない。もしかしたら考えるのさえやめているのかも。けれど僕は毎日、どうにかし

ないと、とだけは思うようにしている。心の底まで今の彼女の状態に慣れてしまわないように気を付ける。朝は静かだ。昼にもなればこの場所はおもちゃ箱をひっくり返したかのような光景になる。だから今の静けさはちょっとばかり寂しいものがある。誰もいないビルの中を歩いているような気分。コスプレ街と言われるような趣は全く感じない。ひょっこり誰か現れないだろうか、と周囲に気を配りながら、太陽を見に今日も外へ行く。

電車で外の世界に出る。やっと空が見える。今日は晴れ。嬉しくなる。とうとう梅雨が明けた。夏は近い。気持ちのいい空を見ていると、視界の中に人が入ってきた。やたらと小さく見える。お人形くらいのサイズ。そう見えるのは彼が空を飛んでいるからだ。ゆっくりと飛んでいる。パトロールあるいは散歩をしているのだろう。

「いいなあ」清々しい青をバックにして飛んでいる姿が羨ましい。

飛行は魔法を使えない人間が憧れる行為の一つなのだけれども、大学の友達とかはそれよりも魔力を使ってド派手なバトルをしたいと思っているようで、僕のように飛ぶことに憧れているのはおっさん臭いと言われてしまう。でも僕は何年も前から飛ぶことに憧れていた。空は僕らにとって夢に等しい。理想としている瞬間がある場所として見ているうちに、空の青さが理想のようにさえ見えてくる。

大学は結構居心地のいい場所だ。ここにいる人たちは飛べない。自分の魔法で魔法使いとして活動していけるような才能のある人の大半はこんな所で勉強しようと思わないものだ。その能力を手にした人間は中学や高校の時点で学問から離れて、魔法を利用して生計を立てていく。だから大学にいる面々は大人しく物理法則に従っている人たちばかり。その中にいるととても安心できる。

「なあなあ、聞いたか？小学生の天才魔法少女」学食。友人の質問に「いいや、何それ」と答える。皆が学食の食べ物を食べている中で僕だけ持ってきた弁当を食べていて、浮いている。一緒に話しながら食べている田中がその感じを薄めてくれている。その田中が携帯端末をいじり、画像を表示してこちらに見せてきた。あどけなさ

のある顔の整った少女。「期待の新人、大森ゆみちゃん。まだ小学四年生なの。超可愛いし、たまらん」ロリコンめ、と言ってやる。それから「やっぱ引っ張りだこになるのかなあ」と聞いてみる。「勿論そうなるだろうよ」と田中は言った。「天才ってだけあって、結構派手なことできるらしいからテレビにも出るだろうな」楽しみだなあ、と田中の目はとろんとしていた。魔法は芸になるし派手な映像にするために金を使う必要も無い。小学生で魔法使いとして活動しているとなれば、全国の少女とその親に夢と希望を与えるに違いない。アイドル的な面も期待される。大変だろうなあ、と思った。「俺も可愛くて天才な魔法少女に生まれたかったなあ」と田中は羨ましがっている。そうだね、と同意しておいた。

「でも本当に羨ましいよ」と田中。少女を見て伸ばしていた鼻も元に戻っている。「あいつら、俺たちにできないことができて、しかもそれで食っていけるんだからよ」溜め息と交代するように食べ物を口に入れていた。「まあね」使えない人間にとって、魔法は遠い世界のお話みたいだ。あちらは派手に稼いで、こちらは地道に稼ぐしかない。そんな印象を持っている。

「そうそう、中学の時にさ、クラスにいたんだよ、魔法使いのやつがさ」そう言う田中のフォークが少し乱暴になる。プラスチックの皿とぶつかって音を出す。でもすぐに大人しくなる。「あいつ今どうしてんのかなあ」遠い目。「いじめられたりした？」田中は首を振った。「いんや、逆。暗いっていうか大人しいやつだったんだわ。正直最初の頃は魔法使えるってこと知らなかったんだけどさ。そればらしたやつがいて、そっから魔女狩りだよね」フォークでコロッケをぶすりと刺した。それから「ああ、でも男だから魔女じゃないか」とコロッケを口に運ぶ。魔女狩り。そういうこともあるんだなあ、としみじみする。「で、どういうことしたの？」まあ色々と、と答えてきた。

「でもまあ普通のいじめより過激になったな。魔法使い様なんだからこんぐらいどうでもねえべ、って感じでさ」それで実際に何をし

たのか、と食い付く。「ライター持ってきてたやつがいたんで、それで教科書とか燃やしたりした。プールの授業の時は当然沈めたしな」そうやっていじめているうちに登校拒否になって、それ以降一切学校に顔を出さなかったらしい。おっかないこともあるものだ。「あいつ今どうしてるかなあ。ちゃんと生きてるかなあ」心配しているようでありながらも、魔法使いだからどうにでもなるだろうけど、といくらか楽観しているようだった。自分がいじめた相手の人生がとんでもないことになっていると知ったらやりきれないものだ。でも魔法使いの人生は常に輝いているわけではない。「犯罪グループのメンバーになっていたりして」その力を犯罪に利用する輩も当然いる。いじめられたせいでそういう道に走るかも。そう言ってやると田中はがっくりとうなだれた。「勘弁してくれ」自分がいじめられたわけではない。彼の心を痛めつけるのもここまでにしておこう。「ああ、やっぱりとんでもないことをしちまったんだなあ」と後悔しているようだが、もうどうしようもない。それがわかっているから「復讐されないように祈らないとね」という中途半端なフォローになってしまった。「まあ、そんくらいしかできねえよな」田中はフォークを皿の上に静かに乗せた。

受けるべき講義を受けたらすぐに帰る。残っていても何も起こらないし、なるべく早く帰らなくてはならないという義務感があった。帰りの電車で携帯端末をいじっている少しの時間。ネットに繋いで情報を探す。魔法使いとしての才能を開花させるのにいい方法はないだろうか。しかしいくら探しても都合のいい方法は無い。一般的によく知られているような方法でしか魔法を使えるようにはならないみたいだ。でも今の美咲には不意に魔法に目覚める程の気力なんて無いだろうし、魔力をレンタルして魔法に慣れる手段でいきたいのだが誘いにくい。いい誘い文句を探して数ヶ月。全然思い付かない。

あの頃の、自分は魔法少女になるのだと信じて目を輝かせていた頃の美咲なら簡単に誘うことができたのに。それか、沈んだ反動で

「私、やっぱり魔法使いを目指してみよっかな。まあ私ならいけるでしょ」と不自然なくらいに積極的になってくれてもいい。心がなりたいという意思一色に染まってくれれば、僕は用意できる手を全て打ってやれる。けれど彼女はそうならない。夢へ進む勇気を失い、夢を諦める勇気も生まれない、そんな美咲との適切な付き合い方がわからないまま僕は彼女と一緒にいる。申し訳ないと思う。こういう時にトラブルをすぱっと解決してしまうトラブル除去の魔法があればいいのに、と思ってしまう。そんなものあっても使ってはいけない。楽な方向に行こうとする自分を叱った。

今日も天井のある街はにぎわっていて、演技をしている街という本当の姿を現している。駅周辺をちらりと見ただけで今日は赤いメイドを二人も見つけてしまった。今日は運がいいみたいだ。それと知っているゲームのキャラクターのコスプレをしている人がちらほら。話しかけてみたくなる。しかしそう思って話しかけたことはこれまで無いし、今日もなるべく早く帰ろうと都合のいい言い訳があって、通り過ぎていく。ちょっと早足で歩く。ここではコスプレをしていない自分が浮いているみたいに思えてくる。ここで歩くために、コスプレ用の衣装ではないけれど、空気に合った服は持っている。けれどそれを着て大学には行けないし。そうやって過ごしているうちに早足で歩くのが速くなってきたようだ。すたすたと足を前に進ませてアパートへ帰る。途中で羽と尻尾を生やした悪魔か何かのコスプレをしている人を見た。羽が大きい上に尻尾も長くて前から見ているのに悪魔とわかる。肩や太ももまで晒している露出度の高い黒い服で、イメージとしてはサキュバスが近いのだが露出した肌よりも羽と尻尾の存在感がとにかく凄かった。どういうわけか尻尾はだらんと垂れておらず、ぴこぴこと動いて表情を見せている。どういう仕組みで動いているのだろう。しかし気合いが入っている。もしかしたら近所に住んでいるのかもしれない。凄いコスプレをしている人は大体この天井の下に住んでいるものなのだ。コスプレした状態で歩くことが許されているこの街になるべく長い時間いるこ

とで、コスプレを普段着に近付けようとしている。きっとそういう生活をしているその人の顔には眼鏡。悪魔で眼鏡なんてアンバランスな気がするが、眼鏡が妖しさを増加させてマッチしているようにも見える。

そんなコスプレイヤーを照らしているスポットライトが天井の照明というわけだ。もしかしたら彼女たちには僕と違ってあの光が凄く輝いて見えているのかもしれない。「ティッシュどうぞですにゃん」ティッシュを渡される。にゃんなんて語尾で話す人なんて、ここでしか見られないだろう。ここで変えるのは衣装だけではない。自分の内面さえも変えてしまう。憧れのキャラクターに近付くため、自分の嫌いな部分を隠すため、なりたい自分に変わるため。理由は様々。どうあれ、このコスプレ街は自分の理想を実現させやすい場所なのだった。

鍵を開ける。「ただいま」と呼びかけるとすぐに「おかえり」と今朝のいってらっしゃいより何倍も元気な声が返ってくる。その落差が胸にちくりと刺さる。軽く走るようにして玄関まで来て再び「おかえり」と言って抱き付いてきた。その過激な行動にもう一度ちくり。こっちは同時に嬉しくもあるから「うん、ただいま」と言いながら、なすがままになる。今日はさらに機嫌がいいらしい。キスまでしてくる。べったりだ。そのべったりに付着している不穏なものを気にしなければ、僕は幸せ者だと思う。美咲は綺麗だ。それこそ魔法使いとしての才能が注目されれば美少女魔法使いとしてテレビに出ていけそうなくらいに。

腕に彼女の体重が乗っかる。そのまま引っ張っていかれる。「それじゃああれ見よ」アニメの録画した分を見るために僕らはテレビの前に座った。コスプレ街は元々アニメやゲームに溢れた街だったため、ここにはそういうものが好きな人間が多い。僕らがこの壁に囲まれた地域に住んでいるのはアニメが好きだからというのが大きいのだ。さらに遡るとまた別の姿があるらしいけれども、今のこの街はアニメとゲームと漫画とコスプレに満ちている。

録画するアニメは美咲の好みで決められる。見る価値があるやつと無いやつとに分けているとは言っているものの、彼女の録画するアニメに魔法少女ものが入ってくることはない。二年くらい前までは大好きだったのに、見なくなった。理由はわかっている。魔法使いを目指す人たちは、それを題材にしたアニメやドラマを見て、それに憧れたから魔法使いになりたいと思うのだ。二年前までは彼女にとって魔法少女のアニメは自分の輝かしい未来。だけど今の彼女にとってそれは叶わなかった夢なのだ。今では彼女の好きだった魔法少女のアニメのボックスも本棚の奥の方に押しやられている。

美咲と一緒に見ているアニメは魔法の存在しないファンタジーが多い。それからロボットアニメのようなＳＦもよく見る。努力や運なんて関係無しに僕らの手が届かないようなものを美咲はアニメに求めている。魔法使いが空を飛んだり戦ったりする、もしかしたら現実にあるかもしれないお話を激しく嫌っているのが手に取るようにわかって、辛い。

巨大な人型ロボットが戦闘へ向かった。画面が激しく動く。僕と美咲が話すことといえばロボットやコスプレのことばかりになる。今日聞いた小学生の天才魔法少女の話なんて当然できない。世間は二十歳の魔法使いよりも中学生や小学生の魔法使いにスポットライトを当てる。若いうちに才能を開花させることが素晴らしいことであるようだ。その方がこれからの人類と魔法の未来が明るいのだと希望を持つことができるのかもしれない。事実はどうあれ大体の人間は高校生になった頃には魔法使いを目指すことをやめてしまう。夢を見ることなんて馬鹿らしい、と。そういう心理が働くせいかどうかはわからないけれど、高校生くらいになってまだ魔法を使えない人間はそのまま使えるようにならない傾向があるみたいだ。僕らはもうすぐ二十歳になる。時間が美咲の夢を押し潰していた。生きている世界とは全く関係の無い世界のお話を見ていると、かえってそんなことを考えてしまう。美咲はそんなことないのだろうか。楽しげだ。でも僕の意識は画面だけでなくそれを映しているテレビそ

のものもしっかり見ていた。どんなに動いてもロボットはその枠から出てこない。

「やっぱこれ格好いいねえ」エンディングも次回予告も見終わってから美咲がそう言う。格好よかったことは確かだったし、アニメそのものは好きだから「うん、今週も頑張ってた」と僕は同意する。美咲は手に持ったリモコンでアニメを見るためだけに使われるテレビを消した。テレビが何も言わなくなった代わりに美咲が喋る。あのキャラがよかった、ここが面白かった。

こちらも彼女の感想に応戦してあれやこれやと言ってみるのだが、何分かすると僕らの頭の中は真っ暗なテレビのようになって、やはり黙ってしまうのだった。空白に焦る。どうしよう、何か。リモコンのボタンを何度も押すように言葉を探してみるが何も反応しない。秒針がたくさん動いて、美咲は分針のように、ことりと僕の方へ傾いた。そこからは滑り台を降りるように動いた。抱き付いてきてキスをしてきて、彼女の手は体を撫でてくる。

魔法少女になることを目指していた情熱を今では念入りに唾液を交わらせることに使ってくる。愛情表現とされる行為を彼女は何度も何度も繰り返す。そんな彼女が気に食わない。僕に依存しようとしているのが見えてしまうから。それでも次第にキスの快楽に嫌悪感が溶かされていってしまう。長い髪が彼女の背中からぱさりと落ちて、かかってくる。その黒に埋め尽くされるように僕は彼女に押し倒された。

性行為を終えて、美咲はキッチンで夕飯を作り始めた。手料理もまた愛情表現となるだろうから彼女は力を入れてそれをする。こっちはぐったりとしながら考える。この状況をどうにかしないといけない。高校生の時はこんなことしてこなかった。持ちかけるのはいつもこちら側で。だから彼女の行為は単に愛情を示すだけではなくて、魔法使いになれなかった自分の存在意義を僕に求めるための行為でもあるのだろう。彼女は演じている。壁に囲まれた街でコスプレをしている人たちと同じように。

どうしてこうなってしまったのか。美咲がどういう心情でいるのか読み解こうと、こういう空いた時間によく考える。大学に入ったもののすぐに行かなくなったこと。たぶん美咲には大学の後が見えなかったのだと思う。ずっと魔法使いになることばかり考えて生きてきて、それが叶わなかったから仕方なく大学に入っただけだから、魔法の無い人生をどうしたらいいのかわからなくなってしまったのだろう。魔法で生きていくことを前提にしていたのに、突然その道が消えてしまったら戸惑うということはよくわかっている。きっと彼女もその暗闇の中にいる。目指すものを失った彼女は誰かが必要としてくれる人間になろうとして、きっと自分の体が人より優れていることを自覚していて、それで肉欲に訴えかけているのだと僕は考えている。本当にそうだったとしても僕は彼女のことを好きでい続けるだろうからいいのかもしれない。でも僕がいいなと思ったのは、自分のやりたいことに情熱を捧げていたあの頃のような彼女で。変わってしまった彼女を突き放すという選択肢は存在しない。今でも愛しているから。綺麗な言葉を吐こうとした自分を、それだけじゃないな、と暗い顔の自分が追い詰める。罪滅ぼしをしたいという念と、それから肉欲もあるはずだ。その上恐怖している。聞こえてくる包丁の音が自分の体を刻む音に変わってしまいそうで。そういう感情を隠して自分も彼女の演技に合わせて踊っているだけなのかもしれない。そんな自分がたまらなく嫌になる。

夕飯はとてもおいしいカレーだった。どんどん上達していっている。「どう？今日は結構自信ありなんだけど」と聞いてくる彼女に「うん、凄い」と褒めると満面の笑みを見せる。その表情を写真のように切り取ってしまえれば、今の生活は十分に幸福なものなのだけれど、人生は長い映像のようでこの笑顔の前には恐ろしいシーンがいくらでもある。「愛してるんだよ」という言葉に愛情と一緒に刃物のような冷たさが内在しているのを感じてしまった瞬間とか。曇っていない時間はいくら重ねてもいい。けれどマイナスをこれ以上重ねたいとは思わない。この映画は都合の悪いシーンをカットす

ることができないのだから。
　ある程度の規則性とランダム要素に左右される入浴。今日は一人でゆっくりできる。美咲と一緒に入ることになってしまうと浴室の湯気は桃色になってしまう。それはそれで嫌だとは言えないから複雑だ。ただそういう行為によって依存しようとしてくるのは彼女の本来の姿ではないはずだと僕は信じている。だって魔法少女を夢見ていた頃の彼女は、今日の夕食の時に見せた表情のように輝いていたのだから。
　貴重な一人の時間をじっくりと使って疲れを癒す。休日に美咲と入浴することになった日は、一人で落ち着ける場所がトイレだけになってしまう。あそこで心を落ち着けようとするのはいささか空しいものがある。もしかしたら明日からしばらくここで一息つけなくなるかもしれない。未来というのは操作できるものではないから僕はこれから海に潜る前に大きく息を吸うように、ゆっくりと湯船に浸かった。お湯がゆっくりと揺れているのが妙に嬉しかった。美咲ともこうやって穏やかに入れたらいいのに。けれどその願いはまだ叶いそうにない。他人の心は難しい。どうやって癒してあげればいいのか、手の差し伸べ方がわからない。魔法がこれから解明され発展していって人の生活がより豊かなものになっていったとしても、これぱかりは魔法に頼るわけにはいかない。魔法の力で無理やり悩みを解消したら、それは治癒ではなく改造だ。溜め息が出た。このまま重苦しいことばかり考えていてはリラックスにはならない。出ることにする。ざっぱと水が音を立てた。
　ネットを見て時間を潰す。時にネットは泥沼のように利用者の時間を奪っていく。いっそ眠たくなってしまうまで僕らの時間を進めてしまってほしい。一緒にモニターを見つめる美咲も最初は楽しんでいていた。けれども次第に夜の時間を愛の儀式に使おうとして誘惑し始める。体をぴったりくっ付けてきたり、胸を押し付けてきたり。少しずつエスカレートしていって、耐えられなくなる。どれだけ意地を張っても性欲は反応する。だからいつも途中で諦めてこち

らから押し倒してしまう。今日も耳に息を吹きかけてきたりする彼女の誘惑に我慢できなくなって抱き締める。舌を絡ませ合って、それから彼女の顔を見ると、目が綺麗なカーブを描いて微笑んでいて、心の底から嬉しそうな表情をしていた。でもできればその顔は、肩を寄せ合っている穏やかな時に見たかった。そのことを告げられないまま僕らはゴミ箱の中に避妊具を追加した。

今日の美咲はすんなりと眠ってくれたようだ。先に寝てくれると非常に安心する。暗くて表情を見ることはできないが、早朝に見た彼女の寝顔はよく覚えている。きっと今もその時と同じように曇りの無い表情をしているのだろう。起きている時の顔は、挫折しながらも諦めきれていない、そういう苦痛が表情に影を落としているような気がする。だからせめていい夢を見ていてほしい。そう思いながら目を閉じた。

第二話

休日。嫌なことが起こるかも、と悪い方向に想像を働かせれば、休みの日とは思えない絵図が浮かんでくる。月曜日のように起きるのがきつい。遅刻とかそういうものがあるわけではない。ここは二度寝をして少しでも時間を稼ごう。そう思ったのだけど、目が覚めたのがばればれで「ほら起きて」と体を揺さぶられる。ねだったところで駄目だとわかっているのだが「後五分」と定番の台詞を述べてみる。「はいはい、駄目だよ」布団をはがしてくる。休日はよく布団を干すのを理由にしてくる。天井があるここでは雨が降ってこない。だから休日はいつも干す。太陽光も無いということでもあるのだが美咲はいつもベランダに干していた。意味があるのかわからないが、そうした方がそれっぽくはある。「仕方ないな」美咲がギャルゲエロゲの定番に走らないうちに体を起こす。時刻は八時。朝日と同じように点けられる天井からの明かりを身に受けながら体を伸ばす。爽やかなものはあまり感じない。彼女が布団をベランダで干すのと一緒だ。なんとなくそうした方が気分がいい。

朝食をどれだけ食べるのか。食べる人もいれば食べない人もいるということを僕らが知っているように、明確な差が出やすい。僕らの朝食事情も美咲が家事を何でもするようになってから急変した。「出来たよ」呼ばれて携帯ゲーム機から目を移すと小さなテーブルを皿が埋め尽くしているいつもの光景と再会する。一人暮らしをしていた頃はトーストとヨーグルトだけだったのが、彼女の部屋に住むようになってからはこうだ。美咲は朝も昼も夜も全力で満腹にしてくる。過去に猛威を振るったヤンデレという萌え要素をベースに考えれば、そうやって自分の作った物しか口に入れさせない狙いがあるのだと解釈できるが、僕は好意的に捉えて、料理の楽しさに目覚めた結果としている。どうせ彼女の料理以外を口に入れる機会なんて無い。彼女の瞳孔が黒い炎になるまではそう思っていていいん

じゃないかと思っている。すぐに携帯ゲーム機はスリープモードにさせて、手を合わせる。「いただきます」美咲も同時に声を出して、ぴったりと重なった。

おいしい朝食をよく噛んで食べる。その方が健康にいいとよく耳にする。健康はあまり気にしていないけれど、次から次へと飲み込んでいってしまえばこの幸福な食事の時間がそれだけ早く終わってしまう。それが嫌で一口一口よく噛むように自然となった。ずっと食べていたいのに、皿の上にあった物は喉を通っていってしまう。何色もあった朝食が真っ白になってしまったのを見ると切ない。

美咲が家事をしている間、ゲームくらいしかすることが無い。全て美咲がやってしまうから疎外感がある。分業必要。その訴えは何度しても通らない。しかし家事を終えた美咲がこちらに来ても、その後複雑な気分にさせられてしまうのは明らかで。今の彼女がやっていることは、僕の好みをなぞっているだけなんだよな。前にエロ関係の物品を全て回収されたことがあった。それらを捨てずに、僕が大学に行っている最中に見て勉強をしているようだ。行為中に見覚えのあることを彼女はしてくる。聞き覚えのある台詞もちらほら。そう例えばこの前の。ああ、駄目だ。紛らわさないと。ゲームをしている時だけは彼女のことから頭を離すことができるのだから、ちゃんとゲームに集中しないと。

皿洗いを終えた美咲が近付いてくる。そろそろか。セーブしてゲームをやめる準備をする。諦めていた僕に向けられた美咲の明るい言葉は日光のようだった。「ねえ、デートしよ」デート。二人で外出。それはいい。美咲はまだ外で変態行為をするのに目覚めていない。安心安全だ。不純なものはこの部屋の中でお留守番していてもらおう。

着替えた。上下共に黒い服。それから小さな鎖が格好を付けているつもりらしい。ゲームなら、孤独な感じでうろつきながらも主人公のパーティにちょっかいを出して闇属性の攻撃を使ってくるようなキャラがこんな服を着るのだろう。自覚が無いだけで実際にそう

いうキャラと被っているかもしれない。そうだったら嫌だな、と思う。頃合を見計らって、着替えている最中に襲われないために勝ち得た聖地洗面所から出る。すると美咲が「おお」と声を上げる。「いいねえ、何度見てもいいねえ」とにやにやしながら触ってくる。こやつがこの服を選んだのだ。頬が持ち上がってにやにやしているのは、素直に格好いいと思っているのかはたまた面白がっているのか、わからなくて反応に窮する。まあどちらだとしても、それはそれで困る。その一方で「また面妖な服を手に入れましたね」とコメントするしかなかった美咲の服はおそらくゴスロリというやつだ。黒が基調の物で、とてもふわふわとした印象を受ける。それからひらひらとした箇所が多い。「どう？」と聞かれる。お人形さんみたい、という台詞が浮かんだがそれは褒め言葉にしてはテンプレートすぎるんだろうな、と考え直す。「可愛いあまり抱き締めたくなるね」本当に可愛く見える。彼女の体のラインを消すのと一緒に憎憎しさを取り払ってくれているからだろう。抱き締めたくなると言ったからには、じゃあ抱き締めて、と甘えてくる彼女に応えなくてならなくなるのだが、どうにか軽く抱き締めるだけで済んだ。この程度の接触は少し貴重な気がして感動がある。

ここ最近デートをしても行く場所はほとんど一緒だ。美咲はこの天井の下でしか活動しない。僕が美咲と住むようになってからの数ヶ月間、彼女は空を見ていない。彼女が自分にとっての世界をこの引きこもりの街だけにしてしまってからもうすぐ一年が経つ。どうにかしないと。一年後もこうやって天井の下でデートしながら、どうにかしないと、と思っている自分がいそうで怖い。でももしかしたら彼女が柔和な顔つきでいられるようにするにはどんなに頑張っても一年では足りないのかもしれない。何年も何年も今の彼女のまま。それを考えると頭が痛くなる。そんな未来のことなんて考えられない。

僕の着ていて恥ずかしい服も美咲の周りから浮いてしまいそうな服もまるで流行りものの服であるかのように雑踏の中に自然と混ざ

ってしまう。今や店員だけでなく客までもがメイド服を着ている。天井や壁によって他者からの冷たい視線がカットされているように思えること。それがこんな文化が生まれた要因となっているのは明らかだった。高い壁と、天井。それは僕らが生まれる前に起きた殺人事件の影響なのだと言われている。外部から来る害を妨げるための天井。例えばここでは雨とは無縁だ。でもあの天井を見る度に複雑な気分になる。この街でコスプレをしている人たちの中には、コスプレが大好きでそれを楽しむためにやっている人たちもいるけれど、平常時の自分に納得できなくてここで自分のキャラクターを演じている人だっている。それが悪いこととは思わないけれど、そういう面があることを見透かされているから、ここ一帯は引きこもりの街とも呼ばれてしまっているのだろう。そして美咲はその印象にぴったり当てはまってしまっている。本当に着たいと思って着ているならいいけど、ふわふわとしたその服は美咲が現実から逃れようとしていることの象徴のようにも見えてしまう。

本屋をうろつく。置いてあるのは漫画や同人誌。人気の漫画の最新刊が山積みになっていて、その漫画のキャラクターの格好をした人がそこから一冊取っていた。それを美咲も見つけたようで「あ、あの人凄い」とフリルの付いた袖から覗いている白い手がそのコスプレイヤーを指差していた。そして美咲の視線がまた別の凄い人を捉えた。「あの人も凄い。あんなのもありなんだねえ」と感心している目の先ではバンダナを巻いたチェックのシャツの男がリュックサックを背負っていた。リュックサックには丸めたポスターが刺さっている。定番となっているメイドや、流行のキャラクターのコスプレをする人が多い中で、周囲とは異なるオーラを出している。驚いて思わず「あれは伝説のステレオタイプなオタクじゃないか」と漫画のように解説してしまう。

「本当にああいう人いたのかな」珍しいコスプレに美咲も僕も興奮気味になる。「でもあんな格好の人ばかりだったらそれはそれで大変な光景だと思うんだけど」想像してしまったのか美咲はぷっと吹

き出した。「確かにちょっと怖い」ここに壁も天井も無かった頃に非現実に夢中になっていた人たちはああいう格好をしているのだというイメージが根付いている。今のコスプレ街にメイドの格好をしている人が多いのは、その時期にオタクにはメイドというイメージが生まれたからしい。昔から変だったんだな、と思った。美咲にそれを言うと、いいことだねえ、と言ってきた。まるで気持ちのいい昼間にいい天気だねと言うように。

彼女にとってアニメやコスプレは太陽に近い物なのかもしれない。それらに囲まれている時の表情は生き生きとしている。けれどもここではあまりにも空想が溢れてすぎていて、現実と空想の境界線が曖昧になってしまいそうで怖くなる瞬間がある。売っているものはフィクションばかり、そしてそれを売っている人も買っている人も空想から抽出した服を着ている。そんな中にいるとまるで気付かぬうちに色々なアニメやゲームをごちゃ混ぜにした演劇に参加してしまっているような気分になってくるのだ。視線を上に逃がしても空は見えない。夢物語であるはずのこの劇はどこか現実よりも窮屈な気がしてしまう。楽しむための空想ではないから、押しのけられているはずの現実が脳裏にちらつく。僕の考えすぎなのだろうか。美咲は壁の外で漫画を購入する人と同じような所作で漫画を購入していた。「これ楽しみにしてたんだ」とにこにこしている美咲。どうやらおかしいのは僕の方だったようだ。彼女の笑顔を起爆剤にしてもやもやとしたものを吹き飛ばす。でもこのままでいいとは思わない。

美咲と歩きながら色々なコスプレを見ていると、数日前に見た悪魔の格好をした女性をまた見つけた。羽は邪魔にならないように畳まれている。尻尾の方はちょろちょろ自己主張をしていた。「あれ凄いよ。尻尾が動いてる」と美咲に教えてやると「あ、亜紀さん」と大きな声を出して「亜紀さん」と呼びかけながら手を振り出した。すると亜紀さんと呼ばれた悪魔の女性がこちらに気付いて近寄ってきた。「美咲ちゃん、やっほ」お互いに名前を知っているというこ

とは知り合いなのだろうか。美咲に聞くと、そうだよ、と言って「亜紀さん、最近こっちに来たみたい」と紹介した。「よろしくね」と悪魔が友好的に言う。「もしかして美咲ちゃんの彼氏？」と聞かれて美咲は満面の笑みで「はい、そうです」と返す。こんなこと全然無かったから何か恥ずかしい。

　そのままずるりと喫茶店でお茶することになってしまった。美咲が悪魔と知り合いだなんて。コスプレ街は狭い。通りと違って余裕がある。亜紀さんは文字通り羽を伸ばしていた。こうもりのような黒い羽がぴんと伸びる。亜紀さんは前に見かけた時と同じで露出度の高い服を着ているのだが、羽の動きが面白い分苦手意識もそこまで生まれなかった。「そういやその羽と尻尾ってどういう仕組みで動いているんですか？」脳波で動く猫耳のようなものだろうか。しかし頭に何か着けているようには見えない。「それはね。私が本物の悪魔だから動かせるんだよ」悪戯好きの笑みでそんな冗談を言う。美咲が「またそんなこと言って。本当のところどうなんですか？」と聞く。どうやら前にも冗談を言って誤魔化したことがあったようだ。「この前はね、可愛い子を見つけると動くとか言ってたんだよ」と教えてくれる。「なるほど。口説かれたわけだ」と言っていると「君もなかなか面白いんじゃないかな。私の尻尾も、ほら、こんなになってる」と亜紀さんが自分の尻尾を指差した。蛙のおもちゃのように尻尾がぴょんぴょん跳ねていた。本当にどうやって動かしているのやら。どうにかして空気を送り込んでいるのだろうか。それか魔法で制御しているか。でもこの街でそんな目立つことしないよな、とも思う。

「でも本当に面白そうな気配があるなあ。誘惑しちゃおうかな」冗談で済みそうにない亜紀さんの台詞。勘弁してください、と僕が言い終わるや否や「ふざけたことを言っていると殺しますよ」と本気と冗談のカクテルに殺気を添えて美咲が笑顔で言い放った。こちらに向けられた言葉ではないけれど怖かった。亜紀さんに動じた様子は無く「ごめんごめん。本命は美咲ちゃんだから安心して」と手を

合わせた。今度はこっちが嫉妬を覚える番だった。「美咲を取ったら殺しますよ」と美咲の真似をしてみる。「あらら、怖い怖い」同じような反応を見せるがやけに美咲のことが気に入っているようだった。今度は「でも隙があったら奪っちゃうもんね」と言う。にやりとした表情を作っている目が眼鏡の理知的な印象と重なる。その瞬間油断ならない人間に見えた。謎の多い悪魔の格好と含めて、何をやらかすかわからない印象が残った。悪いことをしようとしても加担しないよう美咲に注意しておいた方がいいのかも。そそのかされて犯罪とかしてはいけないよ、と悪魔のいる前では言えないが。

「それに今日の美咲ちゃん、すっごく可愛いんだもん。その服凄く似合ってる。お持ち帰りしたい」と褒めちぎられて美咲は満更でもない様子。「そうですか？ありがとうございます」と言って深々と頭を下げた。「いやいや」と眼鏡の悪魔も頭を下げていた。僕と二人でいる時には全然見ることのできない美咲の動作に、こういうのも面白いなあ、と感じた。「色もいいね。黒はいい色だよ。白もいいアクセントになってるね」そう言う亜紀さんも着ている物は全部黒い。思えばこのメンバー真っ黒すぎる。「これで羽と尻尾があったら完璧だよ」やっぱり悪魔がいいのか。美咲も苦笑いしている。彼女は悪魔には向いていない。

亜紀さんと別れて、服を見に行く。中にあるのはメイド服やアニメに出てきた衣装。コスチュームとしての色合いが強いがこのコスプレ街では通用する格好なので、美咲にとっては十分に服なのだ。アニメのキャラクターが着る服なので露出度の高い物も多い。美咲との過剰な回数の性交によってセクシーな物はトラウマになりつつある。今彼女の着ている服が本当にありがたいくらい。どうか興味を持たないでおくれと願いながら見ていく。祈りが通じたのか美咲は興味を持つことなく通り過ぎていく。店の奥の方にある魔法少女系のコーナーにはあまり近付かない。徹底している。

彼女が足を止めた所にあったのはメイド服だった。種類が多くて一つのコーナーになっている。いよいよ美咲もコスプレに手を出す

のか。これが症状の悪化の表れでなければいいのだが。「どれがいいと思う？」と聞かれたので迷わず「これ」と長袖でスカート丈も長いやつを指した。色も黒と白で派手ではない。落ち着きのあるメイド服には清楚な印象があるので美咲にはぜひこれを着てもらいたい。「こういうのはどう？」美咲が選んだのも白黒で同じような色合いだったが、露出度の高い物だった。「それは駄目」きっぱりと即答したのだが、どうして、と聞かれて困ってしまう。エロ方向に走られるのはちょっと、とそのまま言うのには抵抗があった。しかし嘘をつこうにも他に適当な理由が見当たらない。「目のやり場に困るから」とどうにか改変した。「へええ」美咲の口の端がにたりと上がった。そして悪いことを考えている目。「じゃあこっちにしちゃおっかな」と言う天邪鬼を止めようと言葉を出すが「別にじろじろ見ていいんだよ？」と小悪魔の笑みが深くなるばかり。「そんな格好して外出られたら困るかなって」と言っても、じゃあ家の中でだけ着る、とますます劣勢になっていく。エロを避けようとする態度を怪しまれているかもしれない。冷や汗が出てくる。効果的な言葉を出せなくなって困っていると「ま、どうしてもこっちがいいって言うなら考えないでもないけど」と天邪鬼モードを解除してくれた。「お願いします」頭を下げて機嫌を取った。

アパートに帰ったのは四時頃だった。今日の戦果は漫画とメイド服。メイド服は結構思い切った買い物だったと思う。彼女が服を買うことは少ない。僕の方の事情により流行を追っかけて新しいアニメのコスチュームを季節毎に購入しても全く痛手にならないのだが、彼女はあくまで自分の財産でやりくりしているようだった。僕のお金か彼女の親の金かという差なのだけれども、結構大きな差のようで、こちらのお金は生活費にしか使われない。魔法少女の夢を完全には諦めてはいないことに似た、越えきれない一線があるみたいだった。

その買ったばかりのメイド服を着てみたりするのかな、と思ったのだが美咲は買った物に目もくれずに抱き付いてきて、キスしなが

らベッドに押し倒してきた。美咲は唇を離すと「ねえ、亜紀さんどうだった？」と聞いてくる。「どうだった、って何が」質問の意図がよくわからない。「私より亜紀さんの方がいいとか思ってない？」ああ、そういうことか。「全然」やましいことを考えていなかったから率直な返答ができたはずだった。なのに「本当かな」と疑ってくる。「健太の目、輝いてたよ」何を根拠に。もしそうだとしてもそれはコスプレの完成度に輝かせただけで。しかし正直に言ったところで鎮火させられるのかどうか。言葉を選んで「だって羽とか尻尾が動いたら気になるじゃん」とできる限り屈託無く言う。ふうん、と美咲。真っ黒な瞳が夜の森を思わせる。「私も悪魔になっちゃおうかなあ」と無表情に近い声で言ってくる。本音なのか冗談なのか。とりあえず「ならない方がいいよ」と言って、どうにかしてさっきまでの美咲に戻そうと思った。しかし美咲は「大丈夫だよ。酷いことはしないから」と微笑んだ。顔を見つめたままベルトを外してくる。「でも私のことが忘れられないくらいにしてあげるね」と天使のような声色で言って彼女はいつもより激しく自分の肉体を交わらせてきた。

一度や二度で終わらなかった行為が夕食のおかげで中断された。夕飯の準備を始めた美咲の格好は裸エプロンというとんでもないもので、美咲のことを忘れられないようにする行為がまだ続くということを理解させられた。こういう時でも彼女はしっかりと料理する。量もいつも通り。いつもと同じなのに感じるものが少し違う。丹精込めて作られテーブルを埋める夕食がそのまま性行為の活力になるのだろう。今日寝る頃になってもいくらか残っていてくれと祈りながら噛んで小さくしていく。

食後に裸にエプロンだけという格好をアピールしてきて、入浴する時も泡まみれにしてきた。回数を重ねる度にこちらの性欲は大人しくなっていったのだが、彼女は辛抱強く愛撫してきて必ず僕の性欲を、井戸から水をくみ上げるようにして、引き出してくるのだった。そうやって肉欲の水位を上げるためのキスや抱擁をしては彼女

の肉体に溺れさせられる。美咲は凄く頑張って十一時まで性交を続けた。そんなに必死にならなくても、僕は美咲のことばかり見ているというのにそのことに彼女は気付いていない。手探りしている子どものようで、可愛い美咲。彼女のために僕も頑張って彼女を求め続けた。そして美咲が疲れ果ててから優しく抱擁してやって、二人でぐったりと眠った。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4665ba/

淡くなった空

2012年1月14日14時48分発行